

ホームケアクリニック田園調布

小林徳行

院長



03-6715-6812

homecare-den-en.jp

東京都大田区田園調布2-42-5
アパートメントカヤ101

ビジョン

患者さんの「家で過ごしたい」を支えるために
患者さんの住み慣れたご自宅での暮らしに寄り添い、
心のこもった診療を目指していきます。

「痛みを取る」ことは目的ではなく、「その人らしい人生を取り戻す」ための手段である――。

ホームケアクリニック田園調布の小林徳行院長は、大学病院で緩和ケアに従事し、ペインクリニックの専門技術を磨いてきました。その経験を在宅医療の現場へと広げ、大田区・世田谷区・目黒区を中心に、がんの痛みや慢性疼痛、脳卒中後遺症など幅広い症状に向き合っています。医局で培われた精神と、地域に根ざす覚悟。その歩みと医療への想いを伺いました(2026年2月取材)。

父から託された医師への道

小林先生が医師を志した背景には、ご家族の影響があったとお聞きしました。

私のルーツは、台湾から日本へ留学してきた父にあります。父は戦時中に医師を志して勉強していましたが、時代の荒波の中でその夢を断念せざるを得ませんでした。その後、父は私に対して「東大に行け」と口癖のように言っていました。非常に教育に熱心な家庭でしたが、私自身は高校まで順調だったものの、大学受験では結局二浪を経験することになります。当時は「絶対に医者になりたい」という強い使命感というよりは、理系志向の中で自然と医学部が選択肢に残ったという感覚でした。最終的に日本医科大学へと進学し、私の医師としての人生が始まりました。



日本医科大学での学生時代は、かなりハードな生活を送られていたそうですね。

学生生活の記憶は、とにかく「アイスホッケー部」一色です。医学部のアイスホッケー部は当時から非常に特殊な環境で、練習は常にスケートリンクが空く深夜。夜中に泥まみれならぬ氷まみれになってパックを追いかける日々でした。その過酷さゆえか、部員の留年率も非常に高く、私も含め多くの仲間が苦労しました(笑)。しかし、そこで築いた上下関係や人脈は今の財産になっています。当時の理事長のお孫さんにあたる、学内でも非常に名の知れた先輩とも部活動を通じて親しくさせていただき、医師としての技術だけでなく、組織の中でどう動くかといった人間味のある部分を鍛えられました。

その後、専門として麻酔科を選ばれたのはどのような理由からでしょうか？

実は、これも部活動の先輩からの「お前は麻酔科が向いているんじゃないか」という一言がきっかけでした。当時の日本医大の麻酔科は、日本の救命救急センターや集中治療室の草分け的存在である

初代教授が築き上げた、非常に格式高く、かつ実力主義の医局でした。麻酔科は手術中の患者さんの命を預かり、人工呼吸器の管理から循環動態の調節まで、まさに「全身管理」を行うプロフェッショナルです。内科的な知識と外科的な瞬発力の両方が求められる点に、大きな魅力を感じました。

大学病院での勤務医時代、特に印象に残っている経験はありますか？

20年以上にわたる長い期間の中で、大学病院を中心にひたすら現場で研鑽を積んできました。麻酔科医は手術室の番人のような存在で、そこに入って来るあらゆる疾患の患者さんを診なければなりません。例えば、将来的に在宅医療で向き合うことになる脳卒中後遺症を抱えた患者さんの手術管理や、深刻な痛みに苦しむ方への処置など、手術室であらゆる「疾患の最前線」を経験しました。この時期に培った「まず全身の状態を把握し、緊急事態には即座に介入する」という姿勢は、後の緩和ケアや訪問診療においても私の大きなバックボーンとなりました。



大学院では、どのようなテーマで研究に没頭されていたのでしょうか？

病理学的な視点から「ショック状態」の病態解明に挑んでいました。特にARDS（急性呼吸不全）の研究です。当時は「一酸化窒素（NO）」が体内の血管調節や血流にどう関与しているかが世界的なトレンドで、私もラットを使って敗血症モデルを作り、肺組織にNOがどのような影響を及ぼすかを日々実験していました。非常にアカデミックな世界で、基礎研究の奥深さを知ることができましたが、同時に「やはり自分は臨床の現場で、目の前の患者さんを救いたい」という思いを強く再認識した時期でもありました。

大学病院の緩和ケアから在宅医療へ

医師としてのキャリアの中で、スウェーデンへの留学は大きな経験だったのではないのでしょうか。現地のカロリンスカ医科大学ではどのような研究をされていたのですか？

ストックホルムにあるカロリンスカ医科大学は、ノーベル生理学・医学賞の選考委員会が置かれている世界屈指の拠点です。私はここで1年あまり、人工呼吸器や神経伝達物質、そして麻酔薬に関する研究に没頭しました。非常に刺激的な環境で、当時私が出した成果は、主任教授から「『Nature』に出すべきだ」と言われるほど評価されました。結局、諸事情で別の雑誌への掲載となりましたが、世界のトップレベルで「生体の調節メカニズム」を追究したあの1年間は、私の医療観を深く形成する貴重な...

漫画も掲載しています。続きはQRコードからアクセスください ↓↓↓

